印度學佛教學研究第四十二巻第二号　平成六月三月

中世曹洞宗における夜参について

安藤嘉則

一　はじめに

禅林における「夜参」とは、已に『禅苑清規』第五巻「堂頭煎点」に記されており、これは晩間に行われる小参、即ち晩参として解されている（禅学大辞典）。（尚この「堂頭煎点」は住持による行茶について示したものである。）ところで洞門では『瑩山清規』に結制安居の前日十四日に行茶ならびに小参が行われ、これが近世の諸清規において、大夜参、大夜参茶となっている。そして現在の行事規範では、十四日、晦日の月分行事として、住持が大衆に行茶し、口宣を述べる「夜参行茶」が定められ、洞門では「夜参」というと、実質的には茶礼行事として伝えられてきたようである。

ところで今、ここに検討しようとする夜参とは、中世から近世初頭に至る曹洞禅の参禅方法の一つであり、当時の代語禅的な性格を示すものである。今日ではその伝統も全く失われてしまった修行形態であるが、かつては多くの叢林において、一定の期間にわたって実施され、十七世紀頃まで一定の体系の下にこの参禅が行われていたようであり、以下において、この夜参について代語集・代語抄、また門参類などを主な資料として、その概容を述べてみたい。

二　代語・代語抄における夜参

江戸期に入ると、曹洞宗でも幕府の宗教政策を荷うべく、総寧寺・大中寺・龍穏寺の関三刹による宗門支配が確立されるが、その宗門における権威を象徴するかのように、十七世紀中頃これら三刹の和尚たちの代語集が、中世の世代に辿って数多く出版されている。これらの代語集を見ると、開山忌・歴住忌・結制・解制等の叢林行事や端午・七夕・冬至といった年中行事に因み、各和尚が古則を掲げ、その境涯を端的に代語・着語として衆に示している。これはほぼ年分行事の順に従って収録されており、これによって当時の叢林の行事内容を伺うことができるが、これらの行事の中に、夜参の

開始・終了に関する代語が多く残されていることが注意される。例えば大中寺四世龍洲文海の『龍洲代』（万治二年刊）では、次のような代語を見ることができる。

曹山録在之
夜参始
宗門有八要玄機、回互不回互宛轉傍参樞機密用正按傍提。拶畢竟是唱和那箇之旨。代――君看双眼色、君看双眼色　翰墨全書有之　大化仁禅師本来人答語也（下、二十一、才）

この『龍洲代』では、この他十五例の夜参の代語が見え、さらに大中寺七世天嶺呑補の『天嶺代』が二〇例、総寧寺十三世巨海良達の『巨海代』が一〇例、同十九世大渕文刹の『大渕代』が四例、同二十一世高国英峻の『高国代』が七例、というように、「天下の大僧録」にあった、これら了庵派の和尚達は、その門庭接化において、ほとんど必ずこの夜参を用いていたのである。

しかもこれらの夜参の代語は、各和尚が関三刹に住持した期間に限られることはない。例えば前出の天嶺呑補の場合、七ケ寺に晋住しているが、夜参の代語は洞林寺で二回、春昌寺で四回、傑岑寺で二回[1]、大中寺で五回、伝叟院で五回、最乗寺で二回（計二十回）といった内分けとなっている。こうしてみると、夜参なる修行方法は、比較的小規模の叢林から、関三刹・最乗寺といった大寺院に至るまで、関東の了庵派の寺院を中心に一般的に行われていたと推測される。

この夜参の修行の開始は、各々の代語集において夏入もしくは冬安居入りの代語のすぐ後にこの「夜参始（初）」の代語が示されていることから、夏冬の結成安居に入って、まもない時期であったのであろう。

ところでこうした代語集の多くには、抄が成っており、夜参に関するより詳しい説明が見られるので以下に提示したい。

(1)○私ニ、夜参ハ首句三ツヲ九夜ニ分ケ、九夜ヲ亦タ廿七夜ニ分ケ行フト云モ、ソコ〳〵ニ節々ヲ定メテ於テ、著語フサセ（ヲ）テ修行ノ甲乙（カウオツ）ヲ弁ズルハ、細密ニ心得サセウズ為ダ。（『巨海代抄』上、二七、オ）

(2)夜参ハ曹洞秘密ノ行事ナ程ニ、室中ニ向テ久参上士五箇三箇計リデ行ウ者ダ。夜参ハ初メ句三ツヲ九透リニ分ケ、九透ヲ三九二十七夜ニ行ウテ、絲ヲ乱シタ如クソコ〳〵デ節シヲ験ルガ綿密ノ旨ト云テ、綿密ノ旨ヲバナント提唱シ様ズ。（『大渕代抄』一、八、ウ）

(3)生得、夜参ハ句一ツデ行ウズ丁ナガ、三位ヲ九夜ニ分ケ、九透リヲ廿七夜ニ分ケ、其コ〳〵デ修行ヲ験ムルガ妙密ノ鉗鎚ダゾ。（『鉄外代抄』二、二三、オ）

(4)捻別夜参ハ洞上ノ秘訣ナ呈ニ、廿七夜ガ間ダ綿々密々ニ執行ウテ片落ヌガ紹続ノ旨ゾ。（『鉄外代抄』三、一九、ウ）

これらの代語抄の記述によると、夜参は「洞上ノ秘訣」として「堂奥室内」において「久参上士五箇三箇計リ」で行う

修行であり、二十七夜（三・九・二十七夜）の期間に定められていたことがわかる。そしてこの二十七夜のカリキュラムは、「首句（頭句・初メ句）三ツ」を九に分けさらにこれを二十七に分けたものである。

三　門参類に見られる夜参

ところでこうした洞上の夜参修行について、代語・代語抄類では、具体的に如何なる古則・話頭を二十七夜で参究していたのかを知ることはできない。しかるに神奈川県小田原市香林寺に伝わる数多くの門参類の中に、以下のような「大樹派夜参之目録」「密山派夜参之目録」が伝えられている。(2)

ⓐ**大樹派　夜参之目録**

＊案山点頭
＊白雲功尽青山秀
＊透過那辺看方有出身路
＊万機休罷千聖不携
＊寒炉無火独臥虚堂
＊宝殿無人不侍立、不種—
＊江国春風吹不起、鷓鴣—
＊當処便是鳳凰城
＊天然貴胤本非功
＊坐底坐受用立底立承当
＊楼閣千家月江湖万里秋
＊徳合乾坤育勢隆
＊百姓日用不知
＊月不知明月秋
＊王不存王位
＊湘之南潭之北
＊月船不犯東西岸
空王殿上絶知音
＊五台拍手峨嵋笑
＊黒灼爛銀蹄白象崑崙騎
三世諸仏不知有狸奴白—
因みに大樹派とは大綱下、密山派は無極下であり、ここに了庵派の綱極二派において、参究されていた夜参の二十一の話題が示されていたのである。

ⓑ**密山派夜参之目録**

＊案山点頭
＊丹鳳不栖梧
＊那辺——路
＊百姓日用不知
＊脚跨当門——方
＊王不存王位
＊懐州牛——腹
物外独騎——鐘
三世諸——知有
＊万機休罷千聖不携
＊寒炉——堂
＊宝殿——鳳来
＊坐底坐——当
＊楼閣——秋
＊徳合乾——隆
＊江国春風——裡
＊当処——城
＊天然——非功
＊湘之南潭之北
＊月船不犯——
枢密不得旨

また石川力山氏によって能登永光寺に伝わる「夜参作法七透之分」（「夜参作法」と略）という文献が紹介されている。(3)これは全八十八の話題を掲げ、これを一透・二透・三透、法眼宗一透・二透・三透、対帯之透・兼帯之透・双帯之透に分類したものであるが、各々の透は、いわゆる曹洞三位という自己・智不到・那時という公案体系を基本的な枠組みとして構成され、各話題がこうした体系の中に整理されている。

ところで前出の香林寺の二つの夜参の目録とこの「夜参作法」と対照してみると、(1)前掲資料の大部分の話題（＊を付

したもの）が一致すること、(2)各透を構成する曹洞三位の枠組と話題の順序は例外なく「夜参作法」のそれに一致すること等が指摘され、大樹派と密山派の両目録における諸の話頭が、決して無作意に列挙されたものではないことがわかる。

さらに加賀大乗寺には『夜参之盤』なる文献が所蔵されているが、これは①「序」、②「目録」、③「夜参之盤」、④「夜参因由并句法抜注」、⑤「夜参之図」から構成され、このうち③では、「死活当頭」「転凡入聖」「異類之筋目」「花之筋目」「宏智鉄銀金」等の主題に従って、諸の話頭が九分割の表に配置されている。そしてこの九分割の表も、前出の自己・智不到・那時の三位を基本としたものである。

異類之筋目、自己	**智不到**	**那時**
・特智生児	・泥牛蹈破澄潭月	・累垂鼻孔長三尺
・野狐産孤牛	・白牛転歩雪花地	・牛頭挨尾上
・鉄牛忽産児	・玉馬蹈断瑠璃地	・牛帯寒鴉過白村
・木馬産大像	・白牛雪裏無消息	・半夜黒馬上崑崙
	・白牛雪裏鼻縄断	
法眼宗之自己	**智不到**	**那時**
・玉人端坐白牛車	・不堕前後、穩坐牛背	・頭上角不全、身上毛不出
		・牯牛無角坐炭裏
自己之對帶	**偏正之兼帶**	**位裏之双帶**
・新婦騎驢阿家牽	・黒灼爛銀蹄、白象	・三世諸仏不知有、
・懐州牛喫稲、益州馬脹	・崑崙騎	・狸奴白牯却知有
	・物外独騎千里象	・始信南泉水牯牛
	・万年松下打金鐘	

例えばここに一例として示した「異類之筋目」は、牛馬等の異類に関する話頭を集めて、夜参九透の体系にそれぞれあてはめ、整理したものである。

尚この『夜参之盤』に対して、別系統の異本ともいうべき書が、美濃龍泰寺に伝わる『宗門之一大事因縁』である。(4) 本書の題目は明らかに、①の「序」の冒頭の一文「夫夜参者、宗門ノ一大事因縁也。叶レ句、不レ叶レ意……」に依拠し、最終丁には「祥雲山龍泰寺夜参盤之終也」とある。内容も『夜参之盤』の③④に相当するものであるが、両者は必ずしも全同ではなく、今後慎重に比較検討されるべきであろう。

さてこれら『夜参之盤』『宗門之一大事因縁』で取り上げられている諸の話題とその位置づけも、香林寺・永光寺の前出の夜参の資料と合致しており、洞上の夜参において用いられた話頭が、かなり限定的、かつ固定的であったことが理解できる。そしてこうした夜参が了庵派のみならず、門派を越え、永光寺や大乗寺といった明峰系の叢林においても同様に参究されていたことも知られるのである。

こうした夜参における師家と学人とのやりとりは、「曹洞ノ秘密ノ行事」として非公開性のものであり、『夜参之盤』

④「夜参因由并句法拔注」に

此透ハ、何レモ此格ノ句ヲ下語スベシ。三日出スハ、足土ヲ試ル也。一日ハ当ルトモ、余日ハヅレタルハ、久参ト難レ云ナリ。

と記されるように、これらの話頭に対して、その端的を示す着語を久参の学人に付けさせて、点検を行っていたのである。

こうした中、無極派下の神足らが夜参のそれぞれの話頭に対して模範的な着語を示した秘書が、先の香林寺に『無極派夜参秘訣』として伝わっている。例えば第一透の最初の「自己」の話頭である「案山点頭」に対して、月江正文・泰叟妙康・日峰正益・一州正伊らの著語が、次の如く示されている。

安山点頭〇月江之着語ニ云、蹈翻仏祖、不求跡纎毫、触着成火坑。〇泰叟之着語ニ、露柱点頭三千里外走。〇日峯着語、視自己如寃家。〇一州着語ニ、蘊山破時、天地崩烈。〇花叟着語ニ取ッテ云、大花山立テ叫希有。〇蜜山着語ニ、樹倒藤悟。〇本侍者着語ニ、端的失端的。〇無極云、先ッ案山トワ死処ナリ。点頭ト云ワ活処ナリ。（以下略）

四　結びにかえて

以上の如く夜参に関する諸資料について検討してきたが、中世から近世初頭に至る曹洞宗の各叢林では、夏冬の安居中の重要な接化方法として、この二十七夜の夜参が広く施設されていたことが知られた。このような夜参の起源については、『夜参之盤』④「夜参因由」において、通幻寂霊にこれを求める説が提示されるものの、こうしたシステマティックな接化方法が確立したのは、やはり室町後期に至ってからであると考えられる。この夜参の話題の体系は各門派を通してかなり固定的なものであるが、二十七夜という限定的な期間にこの九透（七透）の体系を参究するには、反面形式的な参禅に堕すという危険性もあったに相違ない。従って「久参上士」にのみその門戸が開かれたというのも、こうした大きな問題点を克服すべく、当然の制限であったのであろう。

1　ただし天嶺は傑岑寺に大中寺晋住の前後二回にわたり入院し、夜参の代語も一回ずつとなっている。

2　この香林寺の貴重な資料については、同寺住職で駒沢大学教授の松田文雄先生のおはからいによって閲覧することができた。謹んで御礼申し上げる次第である。

3　石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論（五）――叢林行事関係を中心として（続）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四三号。

4　石川力山「美濃龍泰寺所蔵の門参資料について（中）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三十八号、において已に研究紹介されている。

＊　尚、脱稿後、佐橋法『龍長国閑話』一八〇頁以降に夜参に関する考察がなされていることを知り得た。

〈キーワード〉夜参、代語、代語抄、門参

（駒沢女子短期大学講師）